

恩師訪問 Vol.17

武田 武志 先生

母校で勤務された方を訪問する「恩師訪問」。第十七回目の今回は社会科教師の武田（滝沢）武志先生。今回広報委員の佐々木寛子（S58年卒）、高橋善博（S58年卒）が取材依頼したところ、武田先生自ら、とても素敵な随想文を書いて下さいました。武田先生本当に本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

定年退職して十一年目。現在、秋田県議会事務局の非常勤職員として、秋田県議会史第六巻の編纂作業に携わっている。非常勤だが、週三十時間勤務なので、毎日県庁に向いている。

私の教員生活は秋高で始まった。昭和三十八年〜四十五年までの七年間だが、新卒だったから、まさに修業の時代で、貴重な経験をした七年間であった。

昭和三十八年頃は、丁度高度経済成長期にさしかかっていた。大卒者には、給料の安い公務員・教員は余り人気になかった時期だが、学校ではベビーブーム世代が高校に入ってくる頃だったので、私のような「デモシカ」教師も必要であったようだ。

担当教科は社会科・日本史なので、毎年三年生を教えることになった。一年目には、その三年生のある生徒から、

新米教師時代

「ノートを読んでいるだけの授業ではないか」という厳しい批判を受けた時もある。歴史の授業は、原始・古代から現代まで、自分なりの言葉で、歴史の変動や必然性を語る必要



現在勤務の県議会事務局にて

要がある。が、新米教師には、きちんとした歴史観などがない。全体像をつかめていない。自分のものになっていない。その辺の未熟さ・不勉強さは、秋高生にはすぐ分かる。

生徒に批判されるような授業であれば、教師の立場はなない。生徒に鍛えられ、育てられた、そんな思いを強くする秋高時代だった。教育論など意識することなく、生徒中心に、自主性を尊重することが教育の基本ということも身を持って学んだ。

試験は、課題を予め示し、記述試験に切り替えた。大学のレポート形式を参考にした。大学生が書くような答案を出した生徒もいた。さすが秋高と感入った。

授業の関係から、学級担任は当然三年のクラスを持つことになり、二年目から、五年連続して、三年の正担任をつとめた。このような例は、教科指導中心の秋高でなければ、経験できなかったのではないかと。

お陰で、当時の卒業学年の同期会などがあれば、声がか

かる。教師冥利に尽きると思ふのは、このような時である。その秋高時代最後の卒業生達も、来年三月に定年退職を迎える。感無量である。

教科外の部活動などでは、いつも複数の部・委員会の顧問を仰せつかった。バレー部、ボート部、陸上部、社会部、ワングル同好会、応援委員会などの顧問を経験した。ある年は、運動部だけで三部と応援委員会ということもあった。何のことはない、合宿や遠征要員として頼まれたのである。それだけ先輩の教員が多かったということなのである。

しかし、このお陰で、インターハイなど全国大会を経験した。ボートや陸上競技では、インターハイに行ったし、野球の甲子園大会やラグビーの花園大会には、応援団引率の一員として、いずれも準決勝まで応援した。七年間でこれだけの経験をした教員は、そんなにいないのではないかと自負している。

秋高の後、秋田北高（十三年）、本荘高（三年）、新屋高（九年）、秋田中央高・定（二年）、秋田南高（二年）、男鹿高（三年）と転動して、平成十三年三月に定年退職した。この間、北高時代の昭和五十年には、自宅の空き地清掃

作業中に、左目を裂傷し、失明する事故に遇った。東大で手術後、コンタクトレンズとメガネを装用し、通常の生活に戻れるようになっていた。もう片方の右眼はもととも視力が弱かったから、あの手術が成功していなければ、正常な視力を失って、三十四歳で教職は辞めていたに違いない。わが人生で最大のピンチであった。

目の怪我以後、生活は眼の保養中心に変わった。病院通いも日常生活の中に組み込まれ、また、出鱈目な生活習慣も幾分修正された。そうした生活の変化の中で、眼の怪我がなければ、教職は全うできなかったかもしれないと思うことすらある。

年齢とともに、新たな病も加わった。幸いなことに、未だ致命的な病魔の宣告はない。最近では、退職後二年目に、左肘にできたこぶが、手術後に悪性のものと判明し、高額医療の世話にもなった。

眼の怪我にしても、最近の病魔にしても、決定的ダメージにはなっていない。その一歩手前で、神様が手を差し伸べてくれているかも知れぬなどと、勝手に解釈している今日この頃である。